

69

カタカナで名付けられた最初の売薬 「ウルユス」について

野尻佳与子

奈良女子大学大学院 人間文化研究科 博士前期課程

「ウルユス」は、大阪の薬舗、健寿堂（松尾丈右衛門）が文化9年（1812）頃から昭和初期まで販売していた、本邦初のカタカナ表記の売薬とされている。現在はカタカナ名の市販薬が大半を占めているが、昭和初期までは珍しく、江戸時代には数えるほどしか流通していなかった。本報告は、蘭学の流入と我が国独自の売薬文化の接合について考察するものである。現存する看板、引札、弘方心得書（営業マニュアル）、薬品と包紙（効能書）などを分析して、先駆的なネーミングの売薬がどのように考案され宣伝販売されたのか、薬品の原料および形状に関する特徴を論じる。

19世紀に入ると蘭学はいっそう盛んになり、西洋の新しい知識や技術が価値を生み出すようになった。商機を見だして、人々の興味を引くために外来語を使った宣伝を試みる商人も現れた。「ウルユス」は、こうした蘭学ブームに便乗して命名されたようだが、オランダ語の辞書には見あたらない。外来語のように見せかけて、効能とされる（腸を「空」ス）の漢字を三分解した造語だと、大槻文彦（『大言海』序文、1930）は述べている。これに対して、清水藤太郎（雑誌『黒船』、1938）は、「空ス」を、単に「腹を空にする」緩下剤と見なすのは早計だと述べた。漢薬法の四大療法に「汗吐下和」と称するものがあり、汗とは「体表より毒を出す」、吐は「口より毒を出す」、下は「肛門より毒を出す」、和は「体内にて毒を和する」もので、「汗吐下」の働きをする薬物を「空剤」という。つまり、腹だけでなく、「体内の毒を去りて空になす」薬剤だと説いている。したがって看板表記の、「たん（痰）、りゅういん（溜飲）、しゃく（癩）、気の薬」も、「痰を口より吐して空になす、溜飲の毒を和して空になす、癩気の毒を吐して空になす」と解釈している。

看板には注目すべき点がいくつかある。まずはアルファベット文字で、「VLOYM（痰）VAN MITTR（薬）」とあり、オランダ語で「痰の薬」という意味になるはずだが、この単語の綴りと文法には誤りがある。「VLOYM」の綴りは「VLUYM」の誤り、文法は「MITTR VAN VLUYM」とするのが正確であろう。当時はこうした誤りに気付く人もいなければ、薬の信用を失墜させることもなかった。むしろ、見慣れない外来語や横文字が使われていることは、目新しくて信頼できそうに思えたともいえる。さらに、本舗は大阪であるにもかかわらず、看板に「蘭方長崎」と刻まれていることや、引札や効能書では、薬の処方伝授した蘭医ヘーストル（ヘイシトル・ハイステル）との関わりなど、箔付けや誇大広告とも取れるような宣伝がなされている。

1870年頃に製造されたものと推定される薬品（内藤記念くすり博物館所蔵）が現存している。5×3（15粒）1ブロックの板状になっていて、上包、中包、内包の3層の紙で包装されている。上包に薬の由来、適応疾患名、効能が記され、中包に用法が詳しく示され、直接、薬を包んでいる内包には、服薬の心得と老人と小児に向けた具体的な服用方法が記載されている。これらは包装と効能書を兼ねた実用的な形状となっている。『ウルユス弘方心得書』（杏雨書屋など所蔵）によると、効能書をよく読んで服用することが重要だと説いている。薬品の含有成分の分析を米田該典氏（大阪大学）が行ったところ、大黃を主薬とする製剤であった。（『薬史学雑誌』31-1, 1996）

こうして「ウルユス」は、多くの人々に買い求められ日本全国に販売網ができるほど繁盛した。類似品と見られる「ホルトス」「フルイム」といった売薬も、同様の販売方法で出回っていたことが確認できている。

本研究は、武田科学振興財団、2014年度杏雨書屋研究奨励「江戸時代の伝統売薬『ウルユス』『ホルトス』『フルイム』についての比較研究」の一部である。